

# ぶらりわが街宮沢界限

## (24) 養蚕(ようさん)・蚕種(さんしゆ)・製糸(せいし) —Ⅳ— 製糸工場の隆盛

製糸(繭(まゆ)から生糸を製造すること)の技法も養蚕業の発展により、時代と共に改良が加えられ、明治初期から大正・昭和初期まで、水車や蒸気を動力とする製糸場が全国各地に数多くできた。(日清戦争(明治28年(1895)3月、下関講和会議4月、日清講和条約が調印)の後、我が国の工業は軽工業を中心とする第一次産業革命をほぼ達成しました。この頃になると、製糸の機械化も進み、機械製糸の生産量が増大し、各地に工場ができました。

こうした産業の発展と生糸価格の高騰(こうとう)により、市域でも製糸工場が相次いでつくられました。いずれも明治27年(1894)～32年(1899)頃の間、下記の製糸場などが相次いで設立された。これらの工場は、それぞれ40～100名前後の従業員を抱えていました。

○神山(こうやま)製糸場—①創業者・神山瓊三郎(けいさぶろう)④稼働・明治27年4月～大正初期  
③所在地・拝島村字堂ノ前

○中村製糸場・明治38年8月・同伸社へ名称変更—①中村佐一郎②明治17年6月～大正2年3月、同年4月から熊川村の森田製糸の支店となり昭和初年廃業③大神村字五十鈴(いすず)

○博信社—①共同経営(石川国太郎・中村半左衛門・石川武兵衛達の協業)②明治29年6月～明治40年頃③大神村字五十鈴

○小池製糸場—①小池幸太郎②明治32年12月～大正初期③宮沢村字谷下

○西川製紙—①西川伊左衛門(周蔵)②明治29年8月～昭和18年③中神村字東通

市域では最も大規模の製糸場で、大正年間から昭和にかけて輸出生糸の生産では、多摩はもちろん日本で指折りの製糸工場に成長し、最盛期には本社の中神工場だけで従業員500人ぐらいで、特に女工として大勢の女性たちの働く場所を提供し、東京では「片倉か西川か」といわれるほどだった。創業者である伊左衛門は後に「製糸王」と呼ばれました。

大正14年(1926)株式会社に組織変更した後、八王子工場(元八王子村)、山梨工場(山梨県豊村)、松田工場(神奈川県吉田島村)などの分工場をもち、蚕種部、採種研究所も併設された。戦時中は軍需工場となったが、昭和20年(1945)4月の戦災で大打撃を受け、戦後は織物工場も経営し、事業を転換し工場も移転。工場のあった場所は、玉川町5丁目、中神坂の北部分で、現在は、西川家のほか、保育園、東京都住宅供給公社昭島市玉川町団地一帯です。

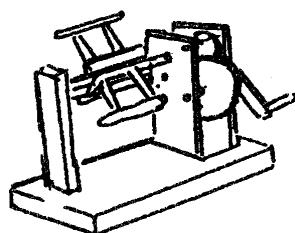
平成5年(1993)オープンした「江戸東京たてもの園」(都立小金井公園内)に移築されている西川家別邸は大正7年(1918)、接客のために日本建築の粋を集め建てられたものです。

西川伊左衛門(幼名周蔵)—安政3年(1858)～昭和10年(1936)西川家では代々「伊左衛門」を襲名。周蔵は若い頃は、馬による米販売により基礎を作り、製糸業に転換したと言われている。会社経営のほか、大正4年(1916)から中神村七カ村組合村長に就任、その後北多摩郡会議員を勤めた。

記

防犯宮沢支部会計 西山 禎一

### 座繰(ざぐり) = 糸ひき、糸とりともいう



糸粹(いとわく)に繭から糸をつむぐ器具の一種。手で把手(とつて)を回すと、歯車仕掛けで糸粹が回って糸を巻きつける道具。18世紀後半に発見、幕末から大正時代ごろまで、ほとんどの養蚕農家で使われたもので、生糸を生産したのは製糸工場だけではなかつた。天保年間(1830-1843)より、川越の水村金属の本屋製作所で作つたものが多摩地域には多い。



西川製紙の概観と荷受風景